久留米市文化財サポーターと歩く

# 筑後国府（ちくごこくふ）マップ

久留米市文化財サポーターは、市民の方々に久留米市の文化財行政をサポートしていただくことによって、郷土の歴史に理解を深めてもらい、なおかつ人生のライフワークとして歴史研究を楽しんでいただくために平成 19 年に設立されました。これまでに文化財保護課が催すウォーキングイベント「筑後国府を歩こう」や、久留米城内の東郷記念館における拓本体験会「江戸時代を写し取ろう」などといったイベントに尽力していただき、現在も毎月久留米の歴史や文化財に関する研修を受講されています。

今回は、筑後国府に関して平成 23 年度に文化財サポーターが研究した成果をまとめ、筑後国府マップとしてご紹介いたします。筑後国府は、奈良平安時代の役所の跡で、その後の久留米市の発展の基礎となっており、非常に重要な遺跡です。今も合川の住宅街を歩けば、あちらこちらにその名残を見ることができます。このマップを手に、ぜひ散策してみてください。

久留米市市民文化部文化財保護課

南筑高校内の筑後国府第 4 期国庁跡

## 筑後国府ってなに？

前身官衙の正殿の発掘調査

今から1300年以上前、飛鳥時代の終わりごろ、筑紫国の三井の地（現在の久留米市合川町）に、突如として大型の建物が建ち並ぶ公的機関が建設されました。周囲を川や崖に囲まれた施設は、威容を誇り、地域の人々を圧倒させたことでしょう。この施設は、のちに同じ場所に国府という役所がおかれたことから、「筑後国府の前身官衙」と呼ばれています。「前身官衙」が建設された背景には、当時倭国（日本）が朝鮮半島の百済という国を支援して、おなじく半島の国である新羅や、中国の唐と争っていた状況があります。それ以前から何度か半島に軍を送っていた倭国でしたが、中国大陸が隋に

よって統一され、そのあとを受けた唐が勢いを増すと、倭国はその脅威に対抗するために、唐を模した中央集権国家への道を歩むことになります。その過程で、おそらく軍事拠点である「前進官衙」が、つづいて地方行政府である筑後国府が建設されたと考えられます。この三井の地は、527年の磐井の乱の際、筑紫君磐井（つくしのきみいわい）が最後に戦ったことでも知られる、軍事上の要地であり、街道が交差する交通の拠点でもあります。さらには、筑後川の水運を利用して、半島や大陸へ渡る渡海拠点でもあります。

筑後国府は、このような軍事・経済上重要な地に建設され、都から派遣された国司や、地方採用の下級役人、さらには雑役（税としての労働）として徴用された民衆などが、筑後国の税の徴収や、治安維持、貢物の生産などの地方行政に従事し、三回ほど国庁（中核施設）を移転させつつ、約500年にわたって存続しました。

## 筑後国府の人物列伝

### 道君首名（みちのきみのおびとな）

飛鳥浄御原令の施行以降、全国が 66 国 2 嶋に分けられました。九州は九つの国に分けられ、その一つが筑後国であり、文献上わかる最も古い筑後国守が道君首名です。ちなみに国守とは、今でいう県知事のような役職です。

663 年に越の国（石川県）の豪族の家に生まれた首名は、大宝律令編纂に功をあげた優秀な官吏でした。713 年（首名 52 歳のとき）に遣新羅使から帰ってくると、都に帰る間もなく筑後国守に任ぜられました。それから現役で死去するまでの 6 年間に肥後国守を兼任し、筑後と肥後各地で溜池をつくり、灌漑事業に尽力し、農業生産の安定に大きな役割を果たしました。

死後は、民衆にその功績を大いに讃えられ、各地にある印鑰（いんにゃく）神社は、首名を祀ったものであるという伝説が残っています。

※印鑰神社は国府の印と正倉の鍵を祀った神社で、古代の国府や郡衙などの役所があった場所に存在することが多い。大善寺町夜明、御井町宗崎、合川町、大橋町のほか、大刀洗町本郷、福岡市志賀島など筑後をはじめ全国に分布。

大善寺町夜明神社（旧印鑰神社）の乙名塚（伝首名の墓）

### 葛井連大成（ふじいのむろじのおおなり）

首名の数代後の筑後国守。歌人。万葉集に 3 首記載されています。そのうちの一首に、天平 2 年（730）に大宰帥大伴旅人の宅で大宰府官人や諸国の国司を招いて宴が催された際に歌われた 32 首のなかに筑後国守葛井連大成の歌があります。

**「梅の花　いま盛りなり　思うどち　挿頭にしては　いま盛りなり」**

### 都朝臣御酉（みやこのあそんみとり）

平安時代、地方では、前任国司や在地の有力者が富を蓄え、次々と貧窮農民の土地を買い上げ、私営田を拡大して国の税収納を妨げていました。優秀な国司であった都朝臣御酉は、私営田に課税しようとした矢先の元慶 7 年（883）、部下の筑後掾藤原近成以下の群盗に襲われ、射殺されてしまいました。

### 平家貞（たいらのいえさだ）

平安末期の武将。平忠盛・清盛に仕え、「一の郎党」と呼ばれた重要人物で、「源平盛衰記」には 1159 年に、肥前の反乱討伐のため、大宰大弐清盛とともに筑後守として大宰府に下向しているとされています。有明海を舞台にした平家の日宋貿易に注力していたと思われます。

## 筑後国府のみどころ

### 阿弥陀堂（あみだどう）（通称：おこぼさん）

合川コミュニティセンターから西へ50mほどのところに巨木の木陰に祠があります。この場所は、8世紀後半ごろに第2期の国庁の正殿が置かれた場所で、今でも古代の瓦の破片が落ちているのを見ることができます。9世紀の前半には、第2期の国庁は、瓦葺き、礎石立ちの荘厳な建物であったことが発掘調査で分かっています。

東屋とベンチがあり、夏場の散策の際は、いい休憩ポイントになるでしょう。

### 味水御井神社（うましみずみいじんじゃ）

国道322号線（旧210号線）の朝妻交差点の南東側に、湧水をたたえた杜があります。「朝妻の清水」とも呼ばれ、かつての国司館と筑後国一宮である高良山を結ぶ道の途中にあります。天慶7年（944）「筑後国神名帳」に「味水御井神」と記載があります。のちには朝妻七社ともいわれ、七つの神の中に国長神という神が含まれていることから、国府の鎮守社としての役割をもち、国司が参拝していたと考えられています。今でも高良大社の「へこかき祭り」の際は、この清水で禊をします。

### 筑後国府の東限大溝（とうげんおおみぞ）

大溝の水源地

十三部交差点から北側には千本杉断層が形成した高さ6mの崖があり、その崖の下から湧水が出て池をなしています。その池から筑後川に向かって小河川が流れており、古代には初期の筑後国府の東側を防御する役目を持っていました。

発掘調査時の東限大溝

東限大溝と呼んでいるこの川の傍には、鉄や銅などを加工する工房の跡や、鍛冶道具（1～3）、墨で文字が書かれた土器など（6、7）が発見されており、重要な場所であったことが分かっています。

右写真：大溝出土土器の一部。4は漆付着土器、5は硯

文章・現地写真撮影・取材：文化財サポーター　文章・編集：文化財保護課